

禁止令王国のアリス



彩くらぶ

Irodori Club



禁止令王国のアリス

「何をやっても、うまくいかない」

「思うように、行動できない」

それは、人生を縛り付ける「禁止令」があるから。

「成功するな」

「何もするな」

無意識の中に埋め込まれた、「心のウイルス」

そんな「禁止令」をテーマに、物語を作ってみました。

この物語は、心理学を学ぶためのエッセンス満載の物語にもなっています。

たくさんのエッセンス、見つけてみてくださいね。

彩くらぶ

いろどり★みどり♪

—目次—

- 【1】 匂いを求めて
- 【2】 光と影
- 【3】 岩のつぶやき
- 【4】 変化する孤独
- 【5】 禁止令
- 【6】 遠くのお城
- 【7】 冒険の始まり
- 【8】 王様の世界
- 【9】 目覚めの種
- 【10】 (おまけ) 【何もするな】

あとがき

【1】 匂いを求めて

この花ね、一生懸命育てた花だけど、気に入った匂いじゃなかったの。
だから、この種、もう、いらない。
種を見ただけじゃ、わからないよね。

私がそんなことを思った時、森の奥から私のお気に入りの、とてもいい香りがしてきたの。きっと森の神様が、私の気持ちに答えてくれて、香りのいい花のところまで、道案内してくれようとしているんだわ。

「必ず見つけるね」

森の神様にそう答えたら、風がぷわ～って吹いてきて、とてもいい香りに囲まれた。
まるで、神様がそばにいるような感じで。

この種を見つけた時もそうだった。森の神様に「すぐ枯れない、元気に育つ花が欲しい」てお願いしたら、風がぷわ～って吹いてきて、この花の種が飛んできた。
確かに元気に育ったけど、匂いがね～。

『今度は、自分の足で探しなさい。そばについているから。』

森の神様がそう言っているように感じたから、匂いを頼りに森の中に入っていくことにした。
だけど、どこをどう歩いているか、なんて、冷静に記憶してなかったから、いつの間にか迷子になっちゃった。

この時はただ、香りのいい花の種を手にすることに夢中で、冷静さをなくしていたのね。
おかげで、とんでもない目にあっただわ。
まさか、こんな花の種を、手にするなんてね。

ほら、この花の種、よく見て。
私の、心の物語が詰められた、この花の種。
あなたにも、この種が持つ物語が見えてくるかしら？

【2】 光と影

いつもの森と違って、森の奥には、いろんな不思議な生き物がいた。

行列を作って、みな同じ動きをするリスたち。

大きな木の周りで、木の葉っぱの動きに合わせて踊る鳥たち。

怖いライオンの顔をした、いや、顔を形作っているだけのアリたち。

不思議だったけど、私はそんなことは気にせず、匂いだけを求めて歩いていった。

「こっちの方だわ」

だんだんと、お日様の光も差し込まない深い森になってきた。まるで、木が私を取り囲むように近寄ってきている感じ。暗くて道がわからなくなり、なんとか木につかまりながら、匂いだけを頼りに歩いていた。すると、つかまった木の表面が、グニュっとなった。

「何だろう？」と、手でさぐろうとしたら、急に動き始め、私に飛びついてきた。「キャー！」て叫んだら、その声に反応したかのように風が吹き、取り囲んでいた木々にすきまができ、お日様の光がさしこんできた。さっきの木の方向を見たけれど、そこには何もいなかった。気のせいだったのかしら？

気を落ち着かせて、好きな匂いのする方向を見ると、草むらだらけだけど道筋が見えてきた。光が揺れ動き、神様がほほ笑んでくれている感じがした。

「森の神様が助けてくれたのね。ありがとう。」

揺れ動く光をじっと見つめながら、ちょっと休憩することにした。光が差し込んできたのはいいのだけど、サンサンと私を照らしている感じでまぶしかったから、日陰に移ってみた。だけど、すぐに日差しが移ってくる。おかしいな？って思って、すぐ側にあった岩の穴影に隠れてみた。でも、なぜか目の前にお日様が輝いている。よ〜く見たら、ガラスのハトが、飛びながら輝いていた。びっくり〜。

「ねえ、もしかして、あなた、ハトなの？」

『あ、わかった？どう？キレイでしょ？』

ガラスのハトの声が心に響いてくる。不思議だったけど、そんなに気にしなかった。

「もしかして、輝く力があるの？じゃあ、この岩の穴の中でも、輝けるの？」

『え？うん、たぶん、』

ハトは、穴の中に入ってきた。でも、急に輝きを失った。すると、穴の入口側からの光も消え、あたりはまた、闇につつまれていった。

「あら、もしかして、お日様が見えないところでは、輝けないのかしら？」

『わからない〜、深く考えさせないで〜、禁止令が守れなくなる〜、ただ、輝いていたい〜』

「禁止令？深く考えてはいけないっていう命令なの？」

『わからな〜い、わからな〜い』

ハトは、輝けなくなった自分に驚いているようで、今は何も考えられないみたい。どうしていいかわからずに、ただ、動かずに、闇の中にじっとしている。鳥目だからかな。

わからなくても、どうすればいいか、深く考えてみたっていいのにな。

【3】 岩のつぶやき

『うるさいな～、集中できないだろ』

闇の中で、低い声で、誰かがつぶやいた。ガラスのハトさんの声じゃないみたい。

「あなた、誰？」

重い沈黙が続いた。もしかして、さっきの声は、気のせいだったのかな？

『さあな、もう、自分が誰かもわからないくらい集中してきたからな』

ゆっくりと話す、闇に響く低い声。確かに、誰かがいるみたい。

「何に集中してるの？」

また、長い沈黙が続く。

『さあ、何だったかな』

そういえば、さっきから、ガラスのハトの声が聞こえない。どこに行ったのだろうか？岩にぶつかって、壊れてしまったのかな？

「ねえ、ハトさん知らない？」

『ハト？集中していて、何も見えないからな、ポーポー』

「ポーポー？」

『あれ？ポーポー、おかしいなポーポー』

闇の奥から小さな光が見えてきた。ハトの楽しそうな笑い声も聞こえてくる。近づいていくと、ガラスのハトが輝きを取り戻していた。近くには鳥かごのような檻があって、小さな「ハート」が閉じ込められている。ハトは小さなハートの揺れに合わせ、ゆらゆらと、光の色を変えながら、喜んでいて。私も、一緒に遊んでみようと、光の揺れに合わせ、手をくねくねと動かしてみた。

「ゆらゆら～、ゆらゆら～」

『ハンド君、ハンド君、もっと、光をゆらして～』

檻の中のハートが楽しそうにはしゃいでいる。この手を「ハンド君」と呼んでいるようだ。光を手を受け、ハトと一緒に光をゆらしてみた。

「キラキラ～、キラキラ～」

『ハト君、ハト君、もっと輝いて』

三人で楽しくはしゃいでいたら、だんだん闇が揺れ始め、どこからともなく、光が差し込んできた。

『うるさ～い、子供のようにはしゃぐな～、禁止令が守れなくなるだろ～！』

闇の奥から、苦痛に満ちたうなり声が響いてくる。

「子供のようにはしゃいだらダメなのかしら～♪誰が禁止したのかしら～♪ポンポンポン♪」

『誰が禁止したのかしら～♪ポンポンポン♪』

ハンド君の手で、ゆらゆらしながら、歌ってみた。ハトとハートも、ゆらゆらしながら合唱していた。

『ダメだダメだ、子供のようにはしゃいじゃダメだ～、うるさ～い、出ていけ～！』

苦痛に満ちた大声が、岩の暗闇に響きわたった。その振動に揺り動かされ、岩の中から吐き出されるように、明るい森に放り出された。

振り返ると、目の前の岩が、ゴゴゴ・・・と揺れ動いていた。

『禁止令に集中する邪魔をしないでくれ～』

って、岩の裂け目が口のように動いてしゃべってる～、変なの～。

よく見ると、岩の頭がパカッと割れていて、さっきの小さなハートが檻の中に取り残されたままになっている。

あっけにとられていると、ゴゴゴって音をさせながら岩の頭が閉じていき、元の岩の姿に戻っていった。

『これでいい、これでいい、これで、いい、いい・・・』

響き渡る低い声は、次第に落ち着いて、静かになっていった。

岩の周りで、光がキラキラと飛び回っていた。ガラスのハトが、また輝けるようになったことがうれしかったみたい。

岩のおじちゃんも、みんなと一緒に子供のようにしゃいでみたって、いいのよね。

【4】 変化する孤独

さっきから気になっていたのだけど、森の木が寄り添ってきて、歩くのを邪魔してくる、なぜかしら？

遠くの木の上で、別のガラスのハトがパタパタして、光をさえぎったりもしてる、そんなに迷子にさせたいのかな？

小さな岩が、足元にコロコロ近寄ってきたせいで、つまづきかけたりもした。なんか、この森、変。私の邪魔してばかりいるみたい。

気になったから、コロコロ近寄ってきた、小さい岩をつかまえてみた。すると、グニャグニャしながら逃げようとする。

「どうして、逃げるの？」

『私にかまわないで～、離して～』

かわいそうになって、力をゆるめたけど、なぜか、逃げようとしなない。

「もしかして、一緒に遊びたいの？」

『やめて～、仲良くしたら、禁止令が守れなくなる～』

また、禁止令か。

「仲良くしたら、ダメなの？誰がそんな命令したの？」

『話しかけないで～、ヤダヤダ～』

小さな岩が、狐のような姿に変わっていきはじめ、泣き叫んでいた。

「あなた、狐さんだったの？」

驚いて手を離すと、狐さんは、ピョーンと、草むらの中に隠れた。ガサゴソと、葉っぱが揺れ動いているだけだった。

遊びたければ、仲良くすればいいのにね～。変なの。

【5】 禁止令

日差しが、また、私めがけて光っている。

「ハトさん、禁止令って何なの？」

『よくわからな～い』

深く考えられないらしい。

「岩のおじちゃ～ん、禁止令って何なの～？」

返事がない。集中してるからかな。

岩に向かって、手を使って遊んでみた。

「ハンド君、ハンド君、また、遊んでほしいみたいよ」

ガラスのハトが、私の手、ハンド君にスポットライトをあてて、その影が森の中をゆれ動く。影の動きに合わせて、近くの葉っぱも揺れ動く。

「ぴょっこんぴょっこん、ぽんぽんぽん」

ハトの光が渦をまき、葉っぱの彩りが、ハンド君の周りを着飾っていき、みんなで音と光の彩りを楽しんでいる。

岩が、クスクスと音をたてて揺れ始めた。

『わかった、わかった、やめてくれ～、ぽんぽんぽん』

岩の頭がパカッと割れて、檻の中で小さなハートが踊ってる。

「ぴょっこんぴょっこん、ポンポンポン」

みんなで、心ひとつになって踊っていく。

「ぴょっこんぴょっこん、ぽんぽんぽん」

みんなの気持ちが、高ぶってきたとき、突然、大地がゴゴゴ・・・と揺れ始めた。

葉っぱが、あわてて逃げて行った。

ガラスのハトも、急に光を失った。

岩も、頭を閉じはじめ、小さなハートの動きが止まっていく。

『禁止令は、王様が私たちに課した試練、この試練を味わうことで、ハートが成長していくんだ、むしゃむしゃ』

岩の中から、低い声で、そんなつぶやきが聞こえてきた。

「むしゃむしゃって、試練を味わってるの？それって、おいしいの？」

『苦しいけれど、おいしい』

「なぜ、苦しいの？」

『檻の中のハートが、遊ぼうとして、抵抗するからだ』

「変なの、ハートのままに、自由に遊んで生きればいいのに」

『何を言っているのかわからない、ハートは檻の中でじっとしているものだろう？』

考え方は、人それぞれだから、どれが正解ってないのだろうけど、何か変だな～。

「禁止令を守らなかったら、どうなるの？」

『闇に落ちていく、らしい』

「闇に落ちたらどうなるの？」

『傷だらけになって死ぬ、らしい』

「らしい、らしい、って、実際に、闇に落ちた人を見たの？」

ゴゴゴゴ・・・、岩が揺れながら、また、沈黙してしまった。

大地の揺れもおさまり、また、暗い闇の静かな森に戻っていった。

これが、この国の王様が望んでいることなのかしら？変なの。

【6】 遠くのお城

禁止令って、そんなにいいのかな。試練ってそんなにおいしいのかな。私も、ちょっと、味わってみようかしら。

「どうすれば、禁止令をもらえるの？」

岩は、沈黙を続けている。

再び、サンサンと輝き始めた、ガラスのハトさん聞いてみた。

「どうすれば、禁止令をもらえるの？」

『知らな〜い、王様に聞けば〜』

「どうすれば、王様に会えるの？」

『あそこに行けば、いいんじゃない？』

ガラスのハトが、遠くを指し示しているけれど、森の向こうだから、見えない。

「見えないんだけど〜」

『なぜ、見えないの〜？私には、見えてるのに〜』

そりゃあ、あなたの位置からは、よく見えるでしょうに。相手の立場にたって、深く考えていないんだな〜。

『私の上に上りなさい』

沈黙していた岩が、ゴゴゴ、っと、岩の手を伸ばして、私を岩の上に乗せてくれた。

寝ていたんじゃないんだ。手があるんだ。ビックリ〜。

高い視点から見ると、森のはるか彼方の高台に、ブロックのようなお城が見えた。

「遠いね〜、どう行けばいいのかしら」

『ゴロゴロ行けばいいじゃないか』

岩が、誇らしげに言った。

「私は、岩じゃないんだから〜」

岩はまた、沈黙してしまった。

『その、種、くれたら、近道を教えてあげるよ』

どこからか、声がした。

ガラスのハトが、その声がする方向を照らした。

はずかしそうに、小さな木が揺れて、つぶやいている。

『その、ポケットに入っている種、ちょうだい』

ポケットをさぐってみた。ああ、匂いがいまひとつの花の種か。

まだ、持ってたんだ。忘れてた。

『とてもいい匂い』

「そうかな〜、いいよ、あげる」

小さな木がユサユサと揺れたかと思うと、狐の姿に変わっていった。狐は種を受け取ると、うれしそうにとびまわった。

「なんだ、さっきの狐さんが化けてたのか〜」

自分の正体を知られてしまった狐は、あわてながら、また小さな木に変身して、少し離れて様子を見ている。

「じゃあ、近道、教えてね」

小さな木はゆらっとうなづき、うれしそうに、ゆらゆら揺れながら、歩いていく。でも次第に、たくさんの木の中にまじっていき、どこに行ったかわからなくなってきた。

「お〜い、狐さ〜ん、どこに行ったの〜？」

横にいた小さな木が、突然つぶやいた。

『僕を見分けるためには、この光が必要なのかも』

あ、そばにいたんだ。「この光」って、ガラスのハトさんの光のことかな。

「ハトさん、この小さな木を照らし続けることはできる？」

『う〜ん、私も、その種くれたら、照らしてあげてもいいけど〜』

「あなたも、この種の匂いが気に入ったの？」

『そういうわけじゃないけど、狐さんが喜んでいたので〜』

「いいよ、あげる」

ガラスのハトに種をげると、うれしそうに飛び回り、虹を作って道の行く先を照らしてくれた。

『わたしは〜、虹の光〜』

調子にのって、飛び回っていたら、岩にぶつかりそうになって、急に光を失った。

『この岩は、嫌い』

岩から離れて、小さな木の側に逃げていった。岩の中の闇に取り込まれ、また輝けなくなることが怖いのだろう。

小さな木の側で揺れながら、再び虹色に輝き始めた。

岩のおじちゃんが、何を思ったか、グリグリっと岩の手を伸ばして、虹をさわろうとした。

すると、また虹が消えていく。

「あの虹にさわりたいのなら、ガラスのハトさんを助けてあげると、さわれるかもよ」

『どう、助ければよいのだ？』

「岩の陰でも、光が届くように、岩をパカッと開いてくれるかな〜」

『え？岩を開く？そんなこと、できるわけがない』

「さっき、おおさわぎしたら、岩の頭が開いたじゃない」

『あれは、偶然だ』

「じゃあ、もう一度思い出してみて。どんな気持ちの時に、岩が開いたか」

『あの時は、楽しくて、とてもいい匂いがしたかな』

「どんな匂い？」

『その、ポケットに入っている種の匂いと同じかな』

「じゃあ、この種あげるから、協力してくれる？」

長い沈黙が続いた。また、機嫌が悪くなったのかな・・・。

『いいよ』

ボソッと、岩がつぶやいた。ゴゴゴ、と岩の手が伸びてきた。岩に種をあげると、しばらく沈黙した後、中から声が聞こえてきた。

『ぴょっこんぴょっこん、ポンポンポン』

岩が揺れ始め、岩の頭がパカッと割れて、檻の中のハートが踊っている姿が見えた。あっけにとられて、じっと見てると、また、岩は、閉じてしまった。

『一緒に、ついていこう。必要な時に、岩は開けるから。』

私を、ひょいと岩の上に乗せ、ゴゴゴッと、音をたてながら、動き出した。

「ちょっと、待って、あの虹の光を追いかけていくのよ」

『わかった』

小さな木が進んでいく方向を、ガラスのハトが作り出した虹の光が照らしていく。その後ろを、岩のおじちゃんがゴゴゴ・・・と歩いていく。私を岩の上に乗せて。

「ぴょっこんぴょっこん、ポンポンポン」

『ぴょっこんぴょっこん、ポンポンポン』

大地は、時々揺れるけれど、みんな、それ以上の、笑いの揺れを感じてるから、大丈夫みたい。

【7】 冒険の始まり

頭の中に、天真爛漫なハートを閉じ込めている、岩のおじちゃん。

仲間に入りたいのに、きらわれることばかりしてる、孤独で小さなキツネさん。

深く考えなくて、天真爛漫なお日様のふりしてる、ガラスのハトさん。

そんな同行者と共に、王様のお城に向かっていくことになった。でも、道の先に進むためには、王様が命令した禁止令を守らないと、先に進めないようになっていた。

「素のままであるな」という禁止令を守っている森では、人の姿のままだと通れなかった。岩のおじちゃんの中に入ることで、通ることができた。

「子供であるな」という禁止令を守っている森では、はしゃいでいると通れなかった。みんなまじめに一列になって、行儀よくしていると、通ることができた。

「成長するな」という禁止令を守っている森では、障害物を乗り越えようとすればするほど、通れなかった。無理に努力せず、あきらめた途端に、通ることができるようになった。

「成功するな」という禁止令を守っている森では、迷子になったり、ケガをしたり、何をやっても肝心なところで失敗してしまう。開き直って「わざと迷子になってやる！」と、むちゃくちゃに動きまくったら、すんなりと通れた。

「実行するな」という禁止令を守っている森では、動こうとすればするほど、身動きがとれなくなってくる。何もせず、考えごとをしながら待っていたら、いつの間にか通り抜けていた。

「重要な存在になるな」という禁止令を守っている森では、それぞれの役割を果たそうとすればするほど、何もできなくなっていく。あきらめて、周りの風景になじんでいたら、いつの間にか通り抜けていた。

「仲間になるな」という禁止令を守っている森では、なぜかケンカするよう仕向けられ、仲たがいでしまい、それぞれが自主的に行動することで、通り抜けられた。

「信用するな」という禁止令を守っている森では、それぞれが自主的に行動していることを疑うように仕向けられ、信用せず、何事も事実関係を確認し合うことで、通り抜けられた。

「健康であるな」という禁止令を守っている森では、ケガをしたり、病気になったりすることが多くなり、そのたびに、森の妖精たちに助けられた。健康じゃないし、このまま、この森にいれば、身の回りの面倒を見てくれるので、旅をやめようかと、心の病にかかったら、ポンと、森の外に放り出されてしまった。

「考えるな」という禁止令を守っている森では、これからどうしよう、と考えれば考えるほど、その考えを打ち消す出来事に遭遇した。もう、何も考えず、ただ、感じるままに動いていくと、いつの間にか通り抜けられた。

「感じるな」という禁止令を守っている森では、どこに向かっていくか、感じることもできなくなった。好きな匂いもわからず、視界もさえぎられ、音も聞こえず、五感をふさがれた。仲間の存在すら感じられない中で、感情も失われ、ただ、無になることで、いつの間にか通り抜けていた。

「存在するな」という禁止令を守っている森では、自分自身が活着ているのか、死んでいるのか

、それさえもわからない状態の中で、ただ、この世界と一体になって「自分」という存在が消えていった。森を抜けたのか、森たちと一体になって歩んでいるのか、その区別さえもわからなくなってきた。というより、区別する必要さえも感じなくなってきた。

たくさんの心の試練を味わってみた。

でも、どれも、つまらなかった。

だって、私には、もともと、王様からいただいた、禁止令がないから。

みんな、禁止令を持っていない私を不思議がっていたけど、私はこのままでいいと思っている。

それじゃダメなのかしら？

【8】 王様の世界

やっとのことで森を抜けたら、王様の城が目の前にそびえていた。

それは、灰色で、四角い箱で、何の特徴もなくって、つまらない感じ。

ちょっと、落書きをしてみたら、門番に怒られちゃった。

あ、これって、さっき、どこかの禁止令で体験したな～。

門番につかまって、王様の前につれていかれたのだけど、王様は、宙を見つめながら、ぶつぶつつぶやいていて、私の姿に気づいてないみたい。

『あ～、その禁止令の苦しみは、共感できるな～、乗り越える姿が、美しい～』

もしかして、国民が味わっている禁止令を、王様も心の中で味わっているのかしら。

「あの～」

声をかけても、まったく、見向きもしない。

「わたしが見えませんか～？」

目の前に行っても、まったく見えていない感じ。

「どうして、無視するの～？」

こんなに、自己PRしてるのに。

「なんか、悲しくなってきた」

あれだけ、禁止令の試練を乗り越えてきたのに、なぜか、涙が、ほろりと流れてきた。

『おや？こんなところに、おいしそうな心があるじゃないか』

「あ、気づいてくれた～」

『あれ？お前には、禁止令がないように感じるのだが、変だな～』

「そうなんです。禁止令が欲しくて、ここまで来ました」

王様は私をジロジロながめ、私が体験した森の中のできごとを、ぶつぶつとつぶやきながら、不思議そうに見ていた。

『そうか、君は、そんな存在なのか、、、』

王様は、少し困った顔をしていた。

『じゃあ、君にぴったりの禁止令は、、、これだな』

私の姿が、だんだん消えていく。

『この国に存在するな、だな』

「あ～、これが、私の禁止令か～。でも、何もおいしくないな～。」

消えかけていくカラダのポケットから、小さな種が、ぼろっとこぼれた。その種の中から、かすかに声が聞こえてくる。

『ぴょっこんぴょっこん、ポンポンポン』

突然、私と王様のカラダが、宙を舞い、暗闇の中に放り出された。そこは、小さなハートが輝いている、岩の中だった。そこには、小さな木があって、その枝が私と王様を包み込み、岩のさけめから、グングン空へ上っていった。

虹色の光が、私と王様を包み込み、まるで星空のように輝いていた。

『これは、いったい、何が起きたのだ？』

「う～ん、よくわからないけど、仲間が、遊んだだけかな」

『禁止令を守っただけでは、こんなことはできないはずだ』

「たぶん、禁止令を守らなかったんじゃないかな」

『禁止令を守らずに、こんなことができるのか？』

「心は、自由が一番だからね」

『心の自由だと？そんなことをすれば、世界の秩序はなくなり、王国は滅びるではないか』

「そんなの、やってみないとわからないじゃない」

『やってみて、ダメでした、じゃ、元に戻せないだろう』

「大丈夫。ここは、どうも私の王国みたいだから。王様の心のままに、好きなことやってもいいよ」

『お前の王国だと？ん～む、、、』

しばらくすると、王様のカラダが、虹色に輝きだした。

『お～、これは、これで、なかなか、、、』

次第に王様の姿がバラバラになっていき、いろんな星にちらばっていった。

「あらら、そんなにたくさんの星に行ってみたかったのね。」

しばらくすると、銀河の渦ができ、星たちが集まってきて、元の王様の姿に戻った。

「おかえりなさい。星の旅は、どうだった？」

『そうか、そういうことだったのか』

王様は、すっきりした笑顔で、私を見つめていた。

『そうだな、今は、お前の心の王国にいるんだったな。それもよかろう。』

そう言うと、王様のカラダがボロボロと崩れていき、かけらが集まり、最後は、小さな種だけになった。

「え～、どうなっちゃったの？そんなに、種になりたかったのかしら？」

私は、その小さな種を手に取り、そっと、匂いをかいでみた。

「わあ～、いい匂い～」

目を閉じ、その匂いの世界に入り込んでみた。まるで、虹色の銀河をただよう感じがして、いつの間にか眠りについてしまっていた。

【9】 目覚めの種

目覚めたら、そこは、森の外で、家のすぐ近くだった。
手には、しっかり種を握ってた。
とても、いい匂いがして、いろんなハートを感じた。

岩をつきやぶる天真爛漫なハート。
どんなものにもでも変化できるハート。
心から心へ光を伝えるハート。

そんな、ハートの花を咲かせる種になるのかな。
よく見ると、それは、私が大切に育ててきた、種だった。

「あ～、そうだったのね。ありがとう。」
種を握りしめながら、心の中にいる仲間たちを、ギュッと抱きしめた。
種が、ブルブルっと答えながら、私とひとつになっていく感じがした。
『ぴょっこんぴょっこん、ポンポンポン』
土の中から芽を出し、花を咲かせ、おいしい実をつけていく。
遠くで、虹の光が輝き、小さな木が揺れ、ゴゴゴ・・・と岩の動く音がする。
どこかで、また、誰かが旅をする。
誰かの心の、禁止令王国に向かって。

そうそう、こんなこともあったの。

森の中でね、何もできずに、うずくまっている象さんがいたの。

「どうして動けないの？」

『この足に、わっかがついているから』

よく見ると、ツルで縛っているだけみたい。

「象さんの力なら、ひっぱれば、とれるんじゃないの？」

『それはできない』

「どうして？」

『がんばったけど、とれなかった』

なぜだろう、こんなに細いツルなのに

「私がとってあげようか？」

『やめてくれ！怒られるから』

「誰に怒られるの？」

『今は、いないお父さんに』

「なぜ、怒られるの？」

『お前は、自分の力では、何もできないから、何もするな！って言われたから』

「いつ、そう言われたの？」

『子供の頃』

「じゃあ、今は、自分の力で、引きちぎれるんじゃないの？」

『禁止令を守らないのは、恐くてできない』

また、禁止令か・・・。

「禁止令を守っていたら、安心するの？」

『ああ、何もしないと安心する』

私もやってみようかな。

足に、つるを巻きつけて、何もせず、じっとしてみた。

どれくらい時間がたっただろう。

「ねえ、お腹すかない？」

『そのうち、誰かが、食べ物わけてくれるから』

え～？、待ってられな～い、私には、無理だ、ぜんぜん、面白くない。

「がまんできないから、食べ物とってくるね」

ツルをブチっと切って、木の実を探すために、あたりを見回した。

象さんは、私を不思議そうにながめながら、自分の足に巻きついたツルを、少し動かしてみた。

『あ、このツル動かせるんだ』

ツルを動かすことができないと思っていたみたい。

「あ！あんな高いところに食べ物がある。象さん、その長い鼻で取って～」
象さんは、ツルを伸ばして、少しずつ動きながら、木の実を取ろうとした。

「もうちょっと、こっち、こっち」
ぐ～っと、カラダを動かし、鼻を伸ばして取ろうとした。

「ブチッ」という音が響いて、木の実がとれた。
「やった～」
『あ、自分の力で取れるんだ』
「やれば、できるんじゃない」
『このツルを伸ばせばいいんだ～、この足元のツルを・・・』

「あれ？ツルがないじゃない」
そこには、もう、ツルはなくなっていた。

『あ～、怒られる～』
象さんは、一生懸命ツルを探していた。

「これ、あげる」
私は、髪のリボンを足に結んであげた。

「これで、怒られないんじゃない？」
『ありがとう』

象さんが、少し動いたので、道が見えてきた。
小さな木が、さささっと動いて、道の向こうに消えた。

「ハトさん、ハトさん、狐さんを見つけて」
『ポー、ポー』

返事してるだけで、光が届かない。
「ねえ、ハトさん」

『ポー、ポー』
よく見ると、寝ているみたい。
「岩のおじちゃん、ちょっと、コツンとしてくれる？」

岩のおじちゃんが、石ころを当てると、ハトは豆鉄砲くらったような顔つきになった。
『闇なべは、キライ～』

って、わけわからないことを言いながら目を覚ました。
「狐さんを追いかけて」

ハトは、正気に戻り、狐さんに光をあてた。
「岩のおじちゃん、あの光を追いかけて」

『まかせろ』
私を肩にのせて、岩さんは光を追いかけた
ゾウさんは、足元のリボンに満足しながら、ゆっくりと、後からついてきた。

あとがき

どう？アリスの物語、おもしろかった？
あらあら、寝ちゃったの？
ゆっくり眠って、物語の世界を味わってね。
これは、あなたの心の物語なのかもね。
あなたの心の中の種が、見せる物語。
感じて、育てて、あなたの花をさかせてね。

この世界も、禁止令王国のようなところかもしれないね。
彩くらぶには、旅するアリスと仲間達があります。
そして、あなたは禁止令王国で苦しむ住人。

星占いから見えてくる、あなたの人生脚本。
パステルアートで描く、あなたの心。
あなたが描く、新しい人生脚本で、禁止令のない心の王国に変わっていく。
もう一人の主人公として、あなたの禁止令を解除するための、人生脚本を描いてみませんか？この世界は、みなさんが作る物語でできている。
ひとりひとりが主人公。

あなたの、自由な心の旅が、今、ここから始まる。
あなたの一步、お待ちしております。

彩くらぶ / いろどり★みどり♪

<http://irodoriclub.com>

禁止令王国のアリス

著者：彩くらぶ／いろどり★みどり♪

<http://irodoriclub.com>

2014.2 発行